
ヒーローは小学生 ～HIKARI（光） 番外編～

宇宙の彼方

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒーローは小学生 〜HIKARI（光） 番外編〜

【Nコード】

N5029F

【作者名】

宇宙の彼方

【あらすじ】

人知を超えた強さが身に付く不思議な水晶玉を手にした小学五年生のアキラ。心優しい彼は、この力で困っている友達などを助ける使命感を持ち日々を過ごしていた。ある日、水晶玉の力を目の当たりにした妖怪は、アキラの持っている水晶玉を手に入れようと企む。妖怪の仕業とも知らず、正義感に駆られたアキラは中学生を殺害した犯人を捜そうとするが……

（起）（前書き）

H I K A R I（光）の番外編と言つことで
初の短編トライです！

（起）・（承）・（転）・（結）の四部で構成していきます

文章の勉強をしながら、書いてます。まだまだ、レベルは低いですが、せつかく勉強してるんで、本編の開始時よりは「良くなった」って言われたいなあと思ってます（笑）

（起）

水晶玉？ 最初は、ただのガラス玉だと思っていた。手の中にシツクリと馴染むその玉は、不思議と僕を求めているようで、どうしても手放す事が出来なかった。

その答えを僕が知ったのは、ついこの間の事だ。

〜ヒーローは小学生〜 HIKARI（光） - 番外編 -

日も暮れる頃、友達の「優也」（ゆうや）が、中学生にカツアゲを喰らっている、慌てた様子の、クラスメイトでもある「将太」（しょうた）から聞き、僕は全速力で「お化け公園」へ自転車を走らせていた。

「お化け公園」は、本当は「大馬袈公園^{おおばけこうえん}」と言うのが正しいが、「お化け」の目撃証言が後を絶たない事から、いつの間にか「お化け公園」とみんなから呼ばれ、恐れられている。

車通りの少ない道路にある、コンビニの角を曲がり、古びた民家の間を突き抜けると、一際小さな「お化け公園」が視界に現れる。
鬱蒼^{うつそう}と生い茂る深緑色の木々が、お互いを押し合うかの様に何処までも立ち並び、そのせいで太陽の光がほとんど地面に届かなくなっている。

そんな、都会では珍しい程の森林が、「お化け公園」の一体に広がっている。

お化け公園の入口に到着すると、向こう側に見える錆^{サビ}だらけの滑

り台の下で、詰襟つめえりの学生服を着た、四人の中学生を発見した。

中学生達に囲まれ、既に涙を目に浮かべ怯えていた優也は、僕を見つけるなり、大声で僕の名を叫んだ。

「アキラ、助けてーっ」

優也を取り囲んでいる中学生達の一人は、ガタイが良く、あとの三人も痩せてはいるが、背丈は小学五年の僕を軽く上回る程だ。

「なんだ、このガキ。お前もヤラレに来たのか？」

とガタイの大きな中学生が鋭い眼光で睨んでくる。

ついこの間までの僕なら、怖さの余りに怖じ気づき、優也の立っている場所に僕が居ても可笑しくは無かっただろう……

だけど、今の僕にはコレ（水晶玉）がある。

ゆっくりと四人の下へと向かって歩いてゆくアキラの手の中で、握りしめられた水晶玉が光り輝く。

「友達から奪ったお金、返してあげてよ」

と、四人に対して勇ましい態度で問いかけるアキラ。

痩せた三人の内の一人が、噛んでいたガムを膨らませ、音を立てて壊れた。

「ふん、お前の金も貰ってやるよ！」

ガタイの大きな中学生は、そう言うたアキラに向かって大きく拳を振りかぶった。

だが、紙一重で拳をかわすアキラ。「マグレ」では無く、アキラの目には、相手の拳の軌道がハッキリと見えているのだろう。

一発目の渾身の一打をかわされ、驚きと悔しさで、頭に血が上ったガタイの大きな中学生は、何十発もの拳をアキラに打ち放つ。しかし、それらの攻撃も全て、紙一重で回避してゆく。

アキラの驚くべき動きに、口をポカンと開いたままになっている残りの三人。

さすがに疲れが顔に出てきたのを見抜いたアキラは、強烈な一撃の拳を相手の腹部にめり込ました。

鈍い音と共に、ガタイの大きな中学生の体が「くの字」に曲がるや否や、後方に大きく吹っ飛び地面に崩れ落ちる。

崩れ落ちた中学生は、余りの拳の力に内臓が悲鳴を上げ嘔吐した。その姿に、残りの三人の中学生は、お互いの顔を見合わせ一目散に逃げていった。

アキラは、地面に転がっている優也のお金を拾い集めた。

「ほら、お金返ってきて良かったな」

差し出された優也の掌に、アキラの手から小銭がジャラリと返される。

優也は、先程までの悲愴感溢れる表情から、まるで救世主を見るような憧れの眼差しへと変わっていた。

「マジ凄いよアキラ。やっぱしアキラは、ヒーローだよ」

「ははは、また困った事があつたらいつでも呼んでくれよな」

笑顔で返すアキラ。

二人は、ゆっくりとお化け公園を後にした。

始めは、自動車に撥ねられそうになった時だ。塾の帰り道で信号

を渡ろうとした時、白いスポーツカーが、信号を無視しながら突っ込んできた。

速度を落とす気配も無く、物凄い勢いで僕に迫ってくるスポーツカー。

もうダメだ！ と思った瞬間、ズボンのポケットに入れていた水晶玉……まあ、この時は綺麗なガラス玉だと思っていたけど、それが一瞬光った様な気がした。

次の瞬間、僕は、無意識のうちにスポーツカーのボンネットに強烈なパンチを放っていた！ 自分でも驚いたよ…

ボンネットを凹ました時の、不思議な感触は今でもハッキリ覚えている。

- - (何て柔らかいんだ……)

まるで、ダンボール箱を思いつ切り殴った時のようだ。だが、金属が悲鳴を上げながら形を変え、千切れていく音が凄まじかったのは言うまでもない。

スポーツカーは僕のパンチで、瞬時に急停止し、凹んだボンネットの隙間からは、見た事の無いような複雑な機械の部品が飛び散っていた。

運転していた人は、衝撃で、フロントガラスにヒビが入る程に頭をぶつけていたが、何とか助かったみたいだ。

正直、水晶玉の力なんて考えもしなかった。でも自分ですら、説明する事の出来ない事が、起こった事は確かだった。

そして、次に起こった出来事で、僕は水晶玉の力の存在を知る事となる。

あれは正しく決定的^{まさ}だった。

笑い事じゃないけど、学校の屋上から落ちたんだから。何で落ち

たかつて言うところ、屋上に整理されていた古い机や資材を使ってアスレチックジムを作って遊んでいたんだ。

なんとなく「危ない」って解るだろ？

トランポリンを使って障害物を飛び越えようと思ったら、勢い余ってフェンスを飛び越えてしまったってわけ。

「もうダメだっ！」って思ったとき、目の前で水晶玉が輝きだして、無意識のうちにその玉を掴んだんだ。

そしたら、急に体が軽くなって、ゆっくりと地面に着地ができた。

友達もビックリしていたけど、僕自身が一番驚いたね。

その時に思った……この玉は僕に凄い力を与えてくれるって。

それから、どうやってたらこの水晶玉の力を自由に使う事ができるのか、毎日練習しているうちに少しずつ「コツ」が解ってきて、今では、意のままに力を使う事ができる。

この水晶玉がある限り、僕はヒーローだ。

ガタイの大きな中学生の意識が戻った時には、既に辺りは真っ暗になっていた。「お化け公園」に一つだけある外灯がぼんやりと不気味に辺りを照らし出す。

ゆっくりと立ち上がり、ふと前を見るとブランコの前に、赤い服を着た、長い黒髪の女が俯きながら一人でじっと立っている。大人の女が、こんな夜に不気味な公園で一人でいるのは、余りに不自然だ。

暗闇の中、外灯に照らし出された、女の顔をよく見ると、大きな白いマスクが見える。腰までありそうな黒髪が、顔の上半分を隠し、

大きな白いマスクで、顔のほとんどが見えない。

途端に、ガタイの大きな中学生に悪寒がはしり、体が震えだした。

女は、中学生の方へ顔を向けると、ゆっくりと歩み寄る。ジャリ
……ジャリ……と一步一步、距離を縮める女。

「私……キレイ……？」

ガタイの大きな中学生の耳には、確かにそう聞こえた。

弱弱しく、細い声が彼女をより不気味な者へと感じさせる。

「あ……はい……」と、不気味な程に感じる恐怖を押さえるかの様に、平静を装いながら答える中学生。

すると、赤い服の女は、ゆっくりと白く細い手で、マスクを外した。

中学生は、その女の衝撃的な姿を目の当たりにし、絶句し、凍り
付く……

女の口は、耳の後ろの方まで裂け、涎よだれにまみれた無数の鋭利な歯
が、尋常じゃない程生えている。

全身の鳥肌が立ち、電気が走るかの感覚が襲う。

「それでもキレイ……？」と大きく不気味な目を見開き語りかける
女。

余りの恐怖と、信じられない光景に腰を抜かし、尻餅をつく中学
生。

すると、女の顔が急に陰しくなる。

「あら……そんなに私の顔が醜い……？」

ズリズリと足で地面を蹴りながら、立つ事も出来ず、後退りをす
る事で精一杯の中学生。

女は、おもむろに懐ふところから、刃渡り五十センチ程の巨大なハサミを

掴み、中学生に見せびらかす様にジャキン……ジャキン……と刃を開閉させる。

外灯の光が、ハサミの刃を照らし出すと、赤い液体がまとわり付き、滴る液体がポタポタと地面を濡らす。

ガタイの大きな中学生でも、その液体が何なのかが直ぐに解った。

- - 血だ……！

「止めて！ 助けて！」と言いたいが、声が出ない。

女の大きな口からは、人間の声とは思えない様な恐ろしい笑い声が聞こえるが、その顔は、怒りと憎しみに満ちている。

次の瞬間、ジャキン！！ と言う音と共に、中学生の首が無くなった。

「あの……水晶玉が欲しい……」

そう言い残し、女は闇へと消えていった。

月の光さえ届かないお化け公園は、静寂に包まれた。

くつづく

（承）（前書き）

起・承・転・結の「承」です。

山場である「転」へうまく繋げたかな？　　つてところですが、まだまだ文章能力が無いのを痛感します。

いずれ力が付いたら手入れしようと思いますが、とりあえず完成したんでアップします。

（承）

優也からの携帯が鳴り響いた。

土曜の休日だと言うのに、朝の六時からのモーニングコールはあまり良いものじゃない。

僕は、ベッドの布団に潜り込み、再び襲いかかる眠気を押さえながら携帯のスピーカーを耳に押し当てた。

「もしもし……」

「アキラ、大変だ！ テレビを点けてみる」と慌てた様子の優也の声が、まだ準備が出来ていない僕の鼓膜を容赦なくノックする。

無駄にボタンの並んでいるテレビのリモコンを、枕元のテーブルから手探りで掴んだ僕は、ゆっくりと上半身を起こした。

そして、大きなあくびをしながら電源ボタンをプッシュした。

「ついたか？」

「いま、つけた……」

テレビの画面に映し出された映像には、マイクを持った女性リポーターが、何かを喋っている。

「どうやら、殺人事件らしい……」

しかし、女性リポーターが立っている後ろの、事故現場とされている公園には見覚えがある。

昨日、中学生にカツアゲをされていた優也を助けた公園……「お化け公園」だ。

「マジかよ、昨日行った公園じゃん」

「殺されたのが、アキラがぶっ飛ばした奴なんだよ！」

優也の言葉と同時に、テレビの画面に殺された中学生の顔が映し出された。

どこからどう見ても、昨日の中学生だ。

「首から上を切り落とされたんだって。顔はまだ見つからないって……」

「い、いや。俺はアイツの腹を殴っただけだぜ」

「……どう考えても、僕じゃない。しかも殺人なんて……」

「そうさ、アキラはアイツを殴り飛ばしただけさ。って事は、俺達の後に来た誰かがアイツを殺したって事だよ」

「だったら誰が……？」

僕と優也を繋ぐ電波の間に異様な緊張感が漂うのが伝わってくる。

「このままだと、もしかするとアキラが警察に怪しまれるかもしれないよ」

心配そうに優也は言った。

「冗談だろ？ だったら探すしかないだろ。犯人を」

自分の為でもあるが、きっと、まだ被害者は増えるだろう。だから、この力を使って犯人を捕まえてやる。

優也が受話器を握りしめる音がスピーカーから聞こえた。

「ちよつと怖いけど、俺だって、アキラに助けられてバカリじゃ忍びないよ。一緒に手伝うよ」

「じゃあ、九時にいつもの場所で集合だ」

「わかった。じゃあいつもの場所で……」

学校から歩いて五分ほどの距離にある、ファーストフード店「モクドネルデ」が、僕と優也が「いつもの場所」で通用する場所だ。休日と言う事もあり、開店前から僕を含め、数人が並んでいる。僕はここに来ると、必ずフライドポテトを注文する。

外はサクツとしていて、中がホクホク、そして丁度良い塩加減が堪らない。

いつものように、フライドポテトを嚙^{かじ}りながら待っていると、入口の自動ドアが開き優也と将太が入って来た。

「お待たせ」

優也は僕に手を振り近づいてくる。

どうしてココに将太が？　と言う僕の疑問を察したのか、優也は口を開いた。

「一人でも仲間が居た方が良いだろ。それに将太はパソコンが得意だから、情報収集とか捗^{はかど}るかと思って」

「マジで？　良いのか将太？」

将太は、インテリ眼鏡を中指で押し上げた。

「聞いたよアキラ。僕だって、今までに何度か助けられて来たんだ。どうやったら借りが返せるかと思ってたけど、良い機会だよ」

「ホントありがとな」

僕は笑顔で答えた。

将太は席に着くと、いつも肩に掛けているカバンからノート型パソコンを取り出し、テーブルの上に置いた。

「おお、良いなあ、ノート型パソコン」

優也は羨^{うらや}ましそうに言った。

将太は手慣れた手付きで、ノート型パソコンを起動させている。

そして、流れる様な指捌^{ゆびわ}きで、キーボードをタイピングしてゆく。学校のパソコンを使う受業で、一本の指でタイピングして行くのが精一杯の僕から見ると、まるで神業だ。

本当に間違いなくボタンを押しているのか疑いたくなる程だ。

「これだよ」

将太の掛け声で、僕と優也はパソコンのモニターを覗き込んだ。そこには、昨日の事件についての最新の記事が載っていた。

「殺された中学生の首の切断面に不可解な謎…？ だって」

「どう言う事だよ……」

僕は、眉の間にシワを寄せながら言った。

「ちよつと待つて」

と言いながら、将太は、キーボードにあるエンターキーをプッシュした。

将太は、モニターに映し出された内容を二人に聞こえる様に読み始めた。

「お化け公園で殺された中学生の検死解剖で不可解な事が判明した。中学生の首の切断面は、両サイドからほぼ均等な力で切断されているようだ。今までの事件では必ずと言って良いほど一方方向から、何回にもかけて体の部位を切断しているのに対し、今回の中学生は、恐らく一回で切断されている事になる。その証拠に、何回にもかけて斬られている今までの死体と比べて、切断面が余りにも綺麗と
事」

僕は無意識に手に握んだフライドポテトを嚙り、馬鹿にした感じで言った。

「じゃあ、犯人は二刀流の侍って事かあ？」

「そんな訳ないだろ」

優也は笑いながら否定した。

「まあ、待てよ」

二人の会話を遮り、再び将太がモニターに映し出された内容を読み上げる。

「一発で切断している事から、おおよその刃渡りは三十センチ以上の大きな刃物。それが両サイドからだ、犯人は二本の大きな刃物を所持していた事になる。その上、並の人間では、この様な綺麗な

切断面にはならないとの事。犯人は、やはりその道のプロなのだろうか……？」

「て事は、やっぱり二刀流の侍だろ」

違うと解っていても、それ以外の検討がつかない。

再び、勢いよくキーボードを弾く将太の手が止まった。

「おっと、これもなかなか不可解だぞ」

「なになに？」

と僕と優也も再びモニターを覗き込む。

「血痕が無いんだってさ。お化け公園の外には……一箇所も」

将太は、僕と優也の顔を交互に見ながら言った。

「じゃあ犯人は、お化け公園から忽然と姿を消したって事か？」

優也は目を上にし、考え込む様に言った。

確かに、今までの事を踏まえて考えると、人間の為し得る技なんだろうか？

「口裂け女……かもな」

その時、僕たちのテーブルの後ろに居た、スーツ姿の若い男が振り向きながら声を掛けてきた。

- - そんな訳無いだろ。

恐らく僕を含め、優也と将太もそう思ったに違いない。

「アンタ誰？ てか、何で俺達の話盗み聞きしてんだよ」

そう言ったのは優也だ。

若い男は、自分の席から立ち上がり、僕たちのテーブルの前に立った。

見た感じ、僕でもわかるけど、かなり若い……

「俺は寺村。寺村^{てらむら} 蓮^{れん}だ。今回の『大馬袈公園』での殺人事件について調べている特殊捜査官だ」

そう言いながら、若い男はスーツの胸ポケットから、お馴染みの警察手帳を僕達に見せつけた。

「昨日あの公園で、殺された中学生と君達がもめていたと近所の人からの証言があつてね」

やべえ……もう嗅ぎつけたのか！

絶対に自分じゃなくても、こう言う時は、ドキツとするもんだと初めて感じた。

でも、ここは否定しておかないと……

「あの……俺、疑われてるかも知れないですけど、絶対にやってません」

寺村と言う捜査官の目を見ながら、力強く言った。

「アキラは絶対にやってない、俺が保証するよ」
と優也が弁護してくれた。

「アキラは、絶対にこんな事しません。逆にみんなを助けてくれる僕達のヒーローなんです」

将太も僕の為に必死に弁護してくれる。

「誰が、君が怪しいって言った？」

寺村は、僕達の目を見ながらそう言った。途端にその場が一瞬だけ静まり返った。

「へっ？」

予想外の返答に、安堵よりも先に驚きが来た。

「俺だって、君みたいな子供が殺したなんて思っていないさ」
そう言いながら、寺村は、僕のフライドポテトを嚙った。

「じゃあ、なんで……？」

「だから、君が殺された中学生ともめている時に、何か変なモノを

見たりとか、感じたりとかしなかったか？」

寺村は、僕の目をじっと覗き込みながら質問をしてきた。

「いや、特に何も感じなかったけど」

「そうか……寒気とか、金縛りとかも？」

寺村の質問の内容がストレートに切り替わった様に感じた。

途端に、僕は隣にいた優也の表情が変わったのを見逃さなかった。

「どうしたんだよ、優也」

「気のせいだと思ってたんだけど、アキラがアノ中学生をぶっ飛ばしてくれている間、体が動かなくなっただけで凄く寒かったんだ」

「なるほど……やっぱりな」

寺村はアゴを触りながら言った。

「やっぱりって何なんですか？」

将太が言った。

「それは恐らく霊障害だ。近くに霊か妖怪が居たって事だよ」

そんな馬鹿げた事を、この男はあっさりと口にした。

正直、僕は俗に言う「オカルト系」は信じないたちだ。見た事がないモノは信じない主義だから。

「あんた捜査官だろ？ そんな事を認めて良いのかよ？」

「そっちが専門なんでね」

「専門って、まさか信じろって言うのかよ」

僕は、鼻で笑いながら言った。

「別に信じなくても良いけど。君だって普通では考えられない様な経験はしてるんじゃないのか？」

何の事を言ってるんだ？

心当たりがあるとすると僕の持っている水晶玉だけ……でもそんな事を知ってる訳はないだろ。

「殺された中学生の体には、もうひとつ不可解なモノがあったんだ」
寺村は話を切り替えた。

「首の切断面以外に？」

将太が言った。

「そうだ。バツサリと一撃で首を切るなら、必要の無いモノがあった……アザだよ」

「アザ？」

優也の声が裏返った。

「腹に大きなアザがあった。恐らく殺される前に出来たモノだろう」
そう言いながら、また僕のフライドポテトを囓った。

「くつきりと拳の形が浮き上がっていた。アバラ骨にヒビが入るほどの衝撃が加えられたみたいでな。俺が思うに、君ともめていた時に出来たアザだと思うんだが……」

寺村の視線が僕の腕に向けられる。

「そんな細い腕じゃ出せるパワーじゃない。何か非現実的な不可抗力が無い限りな」

あまりに核心をつかれた内容に、返す言葉が出てこない……

「まあ、その事に関して俺はあえて触れないが、要は信じられない事でもこの世の中には有り得ると言うことだ。君なら解ると思ったけど、アキラ君」

寺村はニコツと笑った。

凄い意味深だ……

でも、この事に関しては触れないと言っているんだから、僕も黙っておこう。

「話を元へ戻そうか」

そう言くと、寺村はまた僕のフライドポテトを齧った。

明らかに食いすぎだ！ コイツも好きなのか？

そんな事はどうでも良いけど、話をややこしくしたのはアンタだろ……と俺は心の中でつぶやいた。

「犯人が『口裂け女』って事？」

優也はまだ馬鹿にしている様な顔で聞き返した。

「そうだ。俺は、今回の事件の犯人は恐らく『口裂け女』で間違いないと思っている」

寺村の表情は自信に満ち溢れているように見える。

確かに、寺村の言うとおり、僕の水晶玉の力だって普通の人達からしてみれば信じられない事なんだろうし……やはり「口裂け女」は実在するのも知れない。

「わかった。じゃあその『口裂け女』がいたとして、どうやって捕まえて退治するんだ？」

「おいっ、アキラ！」

僕の気持ちが少し変わった事に、優也は驚いたようだ。

「それは、今調べている。都市伝説でもあるように『口裂け女』は妖怪だ。幽霊と違って実体があるが、この世の物ではないから不死身だ」

「おい、アキラ。マジでやるのか？」

将太が眉を潜めながら聞いてきた。

「ああ。この目で確かめて本当に『口裂け女』が居たなら、いくら不死身だろうと俺がぶっ飛ばしてやる」

最近観た映画の中の台詞でこんな言葉があった。

「大いなる力には大いなる責任が伴う」

僕が、この力で困っている人達を救っていいこうと思うキッカケになった言葉だ。

どうして僕が水晶玉に選ばれたかは分からないけど、僕には責任がある。

必ず「口裂け女」を倒してやる！

つづく

（承）（後書き）

次はいよいよ山場の「転」です。

アキラ VS 口裂け女 の闘いはどうなるのか？
を期待して頂ければ嬉しいです。

(転)

「でも、どうやって捜せば良いんだ？」

僕は胸の前で腕を組み、考えた。

「捜さなくても向こうから現れるさ」

「どうして？」

すかさず優也が聞いた。

「口裂け女は、子供を狙うんだ。幼く新鮮な肉を手に入れる為に……だから昨日は中学生が狙われた」

「新鮮な肉……」

将太は直ぐにその言葉の意味が分かったのか、顔をしかめた。

「口裂け女は、子供の肉を食べる事で、裂けた口が元に戻ると信じているんだ」

「食べるんすか……」

優也も顔をしかめた。

「そして恐らく口裂け女は、理由は分からないが何十年もあの公園にいるようだ。きつとあの公園にある何かが口裂け女を閉じこめているんだろう」

「へえ。何十年にしては、最近までずっと何もしいまま潜んでいて、急に子供を襲うなんて何か理由でもあんのかな？」

僕は矛盾を突きつけてやった優越感に浸りながらフライドポテトを囓った。

「確かに、今までにも夜遅くに僕達くらいの奴らが公園で遊んでいたのを見た事があるけど、何にもなかったな」

将太がテーブルに両肘をつきながら、僕が指摘した矛盾を更に強いモノにした。

その時、寺村が鼻で笑った。

「口裂け女が現れるのは、三日間だけだ。それも三年周期にな」

そう言いながら、寺村は、近くの椅子を引っ張り、それに座った。

「なぜ三年周期なのかは分からないが、三日間つてのは、口裂け女が整形手術に失敗して、苦悩の末に自殺するまでの期間らしい。それと今から三年前と六年前、九年前と、三年ごとにあの公園で子供が殺されたり行方不明になっているが、誰も一連の事件が繋がっているとは思わなかったみたいだ」

「へえ、そうなんだ。じゃあ昨日現れたのなら、今日か、明日中に退治しないと次に現れるのは三年後か……」
優也が言った。

そんなに待つてられるか！ 今日中に退治してやる。

僕の横で再び将太の指がノート型パソコンのキーボードを走った。

「何してんの？」

僕は将太の肩を持ちながら言った。

「口裂け女について調べようと思って。なにか情報があるかも知れないし……」

ノート型パソコンのモニターに映し出されているページが次々に進んでゆく。

その時、四人を包む静寂の中、一本の携帯電話のコールが鳴り響いた。

寺村の携帯だ。

寺村は、間が悪そうな顔で舌打ちをしながら携帯電話を取り出した。

「じゃあ俺はここで。無茶だけはするなよ」

そう言い残すと、寺村捜査官は電話に出ながら足早に店を後にした。

無茶だけはするなよ　　って、普通止めないか？

だけど、口裂け女が今日、あの公園に現れるという事は分かった。後は倒せるのか……って、僕の中で口裂け女が存在がほとんど現実味を帯びてきているのが少し怖い。

「コレを見てくれ」

将太の声で、僕は我に返った。

僕と優也は、示されたパソコンの画面を覗き込んだ。

「どれの事？」

優也が、急かすように聞いた。

すると、将太はモニターに書かれている内容を読み上げた。

「口裂け女は長い鋏や、出刃包丁、鎌、鉈、斧、メスなど複数の刃物を持っているとされ、人目の多い都会では、隠し持つことのできる鋏や鎌、メスなどが多く、田舎では出刃包丁や鉈、斧など殺傷力の大きい凶器を好む。歯が百三十本生えており、子供を簡単に噛み殺すことができる」

「百三十本も歯があったら、簡単にかみ碎かれるな」

僕は冷静に言った。

「血が目立たない真っ赤な服をきている、血が目立つ真っ白い服を着ている、など服装に関する噂も多い。遭遇した時の対処法として『ポマード』と三回言つと逃げると伝えられているのが一般的だ」

「コレと言つた退治法はみつからないな」

「あつたら、誰かが退治してるよ」

将太はあっさりと否定した。

「おい、何でお前がいるんだよ！」

イキナリ怒鳴り声で叫んだのは優也だ。

優也の視線の先には、僕達のテーブルから二つ離れた所でコーヒを飲んでいる女の子がいる……

同じクラスの島崎しまざき清香さやか、新聞部だ。

島崎は自分のテーブルを離れると、自慢のポニーテールを又ンチヤクのように振り回しながら、優也に食って掛かる勢いで迫って来た。「休日のブレックファーストはココって決めてるの。悪い？」

「そんな事言つといて、どうせアキラを付け狙ってるんだろ？」

優也も負けじと食い掛かる。

「人聞き悪いわね！ 証拠も無いのに勝手な事言わないでよ！」

二人が言い争っている隙に、将太は島崎が履いているコバルトブルーのスカートの後ろポケットから、片手に収まる程の小さな手帳を抜き取った。

「はいよっ」

と僕の手には渡された手帳には、走り書きで、僕達がさっきまで話をしていた口裂け女の内容が所狭しと埋められていた。

「どう言う事だよ」

島崎は観念したのか、俯きながら一呼吸置くとゆっくりと口を開いた。

「わずか一週間で、劇的に変わったみんなのヒーロー、アキラ君の秘密を探ろうと思っていたら、面白そうな事を聞いたって訳」

「だったら、普通に聞いてきたら良いじゃないか。わざわざ付け回さなくても……」

「それじゃあ、本当のあなたを知る事はできないわ。それに、こんな面白そうな事は教えてくれないかも」

島崎は卑しい笑みをアキラに見せた。

「お前は、関わるな。もし本当に口裂け女がいたら無事では済まないかも知れないんだ」

「嫌よ。もう聞いてしまったわ。こんなビツクなネタを前にして指をくわえて黙ってるなんて出来ない」

島崎は僕の目を見ながら力強く言った。

「聞き分けの無い奴だな」

優也が言った。

「あなた達に何て言われようと、私は私なりにやらせて貰うわ」
そう言つと、島崎は僕の手から手帳を奪い、一目散に店を出て行った。

「めんどくせー女」

優也は口を尖らせた。

将太は、ノート型パソコンの電源を切り、カバンに直した。

「で、マジで退治するのか？ アキラ」

将太は真剣な表情で聞いてきた。

「ああ。いなかったらそれで良いし、もしいたらこれ以上犠牲者が
増えない様に退治するしか無いだろ」

「でもさあ、本当にいるのかなあ？ 口裂け女なんて。俺、靈感と
が無いぜ」

まだ、優也は半信半疑といった所だ。僕だって百パーセント信じ
た訳じゃない。

「どっちにせよ、今夜、お化け公園に集合して確かめようぜ。何に
もなければガセ話って事だ」

将太が言った。

「ガセ話だったら、昨日の中学生を殺した犯人がまだどこかに居る
って事か……」

優也は考え込む様に言った。

「まあ、今は、口裂け女の事だけ考えよう。今夜の八時にお化け公
園前に集合だ」

と僕は言った。

昨日、中学生が襲われた時間帯だからだ。

「わかった」

優也と将太はそう答えると、席から立ち上がった。

その時にタイミング悪く、モクドネルデの店員が、優也の肩にぶ

つかりお盆に乗せていたコーヒーが地面に黒い水たまりを作った。
「すいません、大丈夫ですか？ 直ぐに布巾をお持ちしますね」
女性店員は申し訳なさそうに一礼をし、布巾と取りに向かった。

「大丈夫か？ 優也」

と言っ僕の問いに

「別に掛かっても無いぜ」

と優也は答えた。

しばらくすると、店員が現れ、優也の無事を確認すると床をモツ
プで拭き始めた。

僕は何気なしに女性店員の胸元に光る名札に視線を向けた。

『松之宮』

豪華な名前だな、僕なんて『田中』だぜ……

一番乗りで僕はお化け公園の前に到着した。

すると、公園の入口で立哨している二人の警察官を見つけた。

どうやら、不審者が現れないよう、また、現場を荒らされないよ
うに見張っているのだろう。

だけど、こんな所に居られると邪魔だ。きっと追い払われて中に
は入れてくれないだろう。

僕は仕方なく、嘘を付く事に決めた。

「大変だっ！ 向こうのゲームセンターで男が刃物を振り回して、
人を刺そうとしてる！」

「何だって!？」

驚く警察官。

「早く行かないと大変な事になるよ！」

頼む、二人とも行ってくれ……

「よし、わかった」

その時、もう一人の警察官が戸惑いを見せた。

「ここの警備は良いんすか？」

「それどころじゃないだろ。少しの間居なくても何にも無いさ」

「わかりました」

そう言うのと、二人の警察官は、近くに停めてあつた自転車に乗り去っていった。

「馬鹿な奴らだ」

と言いながら僕は胸をなで下ろした。

辺りはすっかりと夜の闇に包まれている。静まり帰っている公園を見ながら一人でいると、まるで肝試しをしている様な緊張感が込み上げてくる。

勢いよく口裂け女を退治すると言つたモノの、時間が経つに連れ怖く感じてくる。

それでも、僕を勇気づけていてくれる水晶玉の御陰で何とかココにいる。

自転車のベルを鳴らしながら現れたのは将太だ。

「お待たせ」

その肩には相変わらずノート型パソコンが入っているカバンが掛けられている。

「お前そのカバン重くないか？」

「いつ必要になるか分からないだろ」

そう言いながら僕と将太が来た道に視線を向けると、自転車に跨またがった大きな影が近づいてくる。

シルエットだけで判断しろと言われるなら、まるで「ガンダム」だ。

序々に近づく影が、外灯に照らされた。

優也だ！

バイクのヘルメットにフットボールのアーマーを装備し、自転車

には鉄バットが刺さっている。そして、その手には、無数のお札が握りしめられていた。

「それ、兄貴に借りたんだろ？」

と将太は半分しらけた感じで質問した。

「まあね。それに、こんだけお札があればどれか一つは効き目があるかも」

と満面の笑を優也は返した。

その言葉に僕は何故か笑ってしまった。釣られるように将太も手で口を押さえながら笑った。

「よし！　じゃあ入るとしますか」

僕は覚悟を決め、気合いと共にお化け公園の出入口を跨いだ。途端に、体に違和感が襲った。公園の外と空気がまるで違う。

重く、なま暖かい……

昨日、優也を助けに来た時とは明らかに違う。

空を見上げても、出入口以外を囲む様に並んでいる大きな木の枝や、だらしなく生えきっている葉っぱのせいで何も見えない。

暗闇の中に、たった一つの外灯が力なく寂しそくに公園を照らしている。

僕達は、塊かたまりながらゆっくりと、公園の中央にある滑り台の下へと向かった。

途中の床に、人の形をしたテープが貼られている。

どうやら、昨日の中学生の遺体の型なのだろう。

早鐘の様に全身に鳴り響く心臓の音を感じながら、辺りに視線を忙しなく巡らせる……しかし何も無い。

周囲に視線を巡らせど、見えるのは薄暗い公園と錆びれた遊具のみ。

結局ガセだったのか……と、落胆と安堵が緋い交ぜになったかの様な溜め息が僕達の口から一斉に吐かれた。

「チエっ、あの男に一杯食わされたな」

優也が、お守りの塊を握りしめながら言った。

優也の奴、明らかに恐怖感に襲われてるじゃないか……

その時、将太の声が聞こえた。

「あっ……」

途端に優也は、体をビクツとさせ、持っていた鉄バットを構えた。

「どうしたんだ？ 将太」

僕は出来るだけ平静を装いながら凍り付いた様な表情の将太に聞いた。

「あそこ……」

そう言いながら、将太は、公園の一番隅にあるブランコを指差した。

そこには、赤いワンピースのような服を着た、髪の長い女が一人で立っていた。

途端に、背中に冷たい汗が流れた。

何をする訳でもなく、どこを見る訳でもなく、ただじっと闇夜の中で佇んでいる。

僕達は、滑り台の影に身を潜めた。

外灯の光に照らし出された女の顔には、ハッキリと白いマスクが着けられていた。

どう見たって、人間じゃない……生気が感じられない。それに、女の周りだけ空間が歪んだように見える。

間違いない。

口裂け女だ！

「あいつ、俺達の事に気付いてないみたいだ」

優也は、女に聞こえないように小声で言った。

「どうするんだ？ アキラ」

将太も小声で、僕に向かって言った。

「わからない。一気に攻めるか……？」

さっきに増して、息が出来なく成りそうな程、心臓の鼓動が激しくなってくる。

いきなり将太が僕の肩を叩いた。

「おい、アキラ！ あそこ……」

将太の視線の先に目をやると、新聞部の島崎がデジタルカメラを片手にし、今正にお化け公園の出入り口を跨ぐところだ。

「ダメだ！ こっちに来るな！」

と僕と優也と将太が必死に声を掛けるも、口裂け女を警戒しながらの小声では、島崎の耳には届かない。

「あいつ、口裂け女に気付いてないぜ」

優也は苛立ちを隠せない様子だ。

僕達の苦労も虚しく、とうとう島崎は入って来てしまった。

次の瞬間、島崎の足下で、小枝が折れる音が鳴り響くや否や、口裂け女が島崎の方へ顔を向けた。

「マズイ！」

優也が声を殺しながら叫んだ。

口裂け女がゆっくりと島崎に近づいてゆく。

さすがに、ただならぬ妖気に気がついたのか、島崎が口裂け女へ振り返った。

そして、口裂け女は、島崎に何かを喋っている様だ。

白いマスクに手を掛けた口裂け女が、ゆっくりと、そのマスクを外すと、島崎の恐怖に満ちた悲鳴が鳴り響いた。

「く……くち！」

優也が目を大きく開き、叫んだ。

言われなくても、見えてるさ……あの大きく裂けた口が！
やってやる！

僕は、ズボンのポケットから水晶玉を取り出すと、大きく空に掲げ気合いを入れた。

すると、強烈な閃光が水晶玉から発せられると同時に爆発しそうなくらいの力が溢れ出してきた。

僕は、拳を思いつ切り握りしめ、地面を蹴り撥ねた。

光と共に、口裂け女の頬にアキラの拳が直撃したや否や、口裂け女は後方の木に背中から激突した。

だが、その表情には一切の苦痛が感じられない。

舌打ちをするアキラの脇で、腰を抜きし地面に座り込んでいる島崎が放心状態でいた。

「危ないから、アイツらと一緒にこの公園から出る」

アキラの掛け声で、正気に戻った島崎は、優也と将太の元へ走った。

「よこせ……それをよこせ」

口裂け女は、そう言う懐から、刃渡り五十センチ程のハサミを取り出し、アキラに見せびらかす様に開閉させた。

ハサミ！？

その時に、僕の脳裏で、将太のパソコンで見た『中学生の首の切断面に不可解な謎……』の記事が浮かび上がった。

「お化け公園で殺された中学生の検死解剖で不可解な事が判明した。中学生の首の切断面は、両サイドからほぼ均等な力で切断

されているようだ。今までの事件では必ずと言って良いほど一方方向から、何回にもかけて体の部位を切断しているのに対し、今回の中学生は、恐らく一回で切断されている事になる。その証拠に、何回にもかけて斬られている今までの死体と比べて、切断面が余りにも綺麗との事」

今謎が解けた……ハサミだったんだ。

次の瞬間、口裂け女は、凄いスピードでアキラに接近し首に狙いを付け、ハサミを開閉した。

しかし、ハサミは、アキラの頭上で空を斬った。石をも真つ二つにしてしまうくらい切れ味が良さそうな音が鳴り響く。

間一髪、体勢を低くしハサミを避けたアキラは、がら空きの口裂け女の腹に何十発ものパンチを放った。

水晶玉の力で、パワーアップし、加速力が増したパンチが無数の爆発音と共にめり込んでゆく。

まるで『マシンガン』だ。

トドメにアキラは、口裂け女の顔面へ回し蹴りを放った。

衝撃と共に口裂け女の顔から火が噴いた。

だが、口裂け女はビクともせず、顔をゆっくりとアキラの方へと向けた。

「うそ！？ 効いてない」

とアキラが言った時に、口裂け女が振りかぶった大きなハサミがアキラの後頭部を弾いた。

目から火花とはこの事か……だが、これで済んだ事自体が奇跡なのか。いや、水晶玉のお陰かもしれない。

お化け公園の出入り口の外で、優也と将太、島崎の三人はアキラの勝利を願い見守っていた。

「俺達、結局何の役にも立ってないな」

優也が言った。

「ああ、そうだな」

その時、島崎は持っていたデジタルカメラで、アキラの激闘ぶりを写真に納めようと身構えた。

だが、それを優也は取り上げた。

「何するのよ！」

「こんな時に普通やるかあ？」

「こんな時だからでしょ！」

優也の手からカメラを奪い返した島崎は、シャッターを切った。

口裂け女は再びアキラ目掛けて大きなハサミを振り回した。

来た！　っとバカリに、アキラは一気に間合いを詰めハサミの遠心力をかき消した。

回転しているモノは、軸となるモノに力を加えれば回転力、すなわち遠心力が失われるからだ。

そのまま、大きなハサミを奪い取り口裂け女を蹴り飛ばした。

アキラは、初めて手にした大きなハサミに驚きながら刃を開閉させて、口裂け女を睨み付けた。

「反撃開始いいいいっ！」

飛び掛かったアキラのハサミが口裂け女の額を捕らえた。体勢を崩した所へ、トドメの一撃をお見舞いした。

ハサミを開閉させず心臓目掛け突き刺したのだ。

初めて痛みに悶える口裂け女の悲鳴が木霊し、大きく開いた口からは無数の鋭利な歯が顔を出した。

「こんななに噛まれたら一溜まりもないぜ」

だがその時、口裂け女の悲鳴が笑い声に変わっている事に気付いた。

「冗談だろ？」

僕は全身の鳥肌が立ったかのような感覚に襲われた。

口裂け女は、笑いながらゆっくりと立ち上がると、自分の手で胸から大きなハサミを抜き始めた。

ステンレスに肉と血が染みつきビチャビチャとした音が不快に聞こえる。

余りの不気味な光景に後退りしたアキラ。

全てのハサミを抜き取ると、口裂け女の胸の傷がみるみる内に塞がった。

そして何もなかったかのようにアキラに不気味な笑みを投げかける。

「やっぱり、あの寺村って人が言ってた通り不死身なんだ」

僕は唾を飲み込もうとしたが喉がカラカラに乾いてしまっている。

勝てるのか？……いや、賽はもう投げられた……

勝つか、負けるかだ！

口裂け女の大きく裂けた口がゆっくりと開いた。

「お前のもっている水晶玉を私に出来ないか？」

「嫌だ！ やるもんか」

アキラは即答した。

「ならしかたない……」

そう言うと、口裂け女の手に握られている大きなハサミが、みる内にその姿を変えてゆく。

何が起こっているのか分からずに呆然と立ち尽くすアキラ。

ハサミはその姿を変え、大きな斧へと変身した。

その大きさは小学五年のアキラの身長と変わらない程だ。

「そんなモノっ！」

アキラは再び襲い掛かった。

電光石火の如く、光を纏った拳を突きこむ。

しかし、アキラの先手は虚しくも斧の刃の平たい部分で受け止められた。

次の瞬間、口裂け女の大きく開かれた口がアキラの顔を覆い尽くそうとしていた。

約百三十本の鋭利な歯に噛まれればタダでは済まないだろう。

恐ろしいスピードに、アキラが気付いた時には、無数の鋭利な歯が粘液の濃い涎に塗れ、目の前で怪しく光っていた。

「ヤバイっ！」

この一噛みで僕は死んでしまう！

でも体が動かない！

優也達の目の前で、馬鹿でかく広がった口裂け女の口がアキラの

肩口まで覆い隠し、今正に噛み砕こうとしている瞬間だ。

「キヤヤヤあああああっ！」

「あきらあああっ！」

三人は大声で叫んだ。

その時、空を覆いつくしている木々の間を一筋の光の柱が突き抜けた。

両手で目を覆っていた島崎が、ゆっくりと手を降ろすと、衝撃的な光景が見えた。

口裂け女の頭の前から光の柱が突き抜けていた。

白目を向いた口裂け女が断末魔を残すことなく、崩れ落ち、拳を高々と揚げ、息を荒くしているアキラの姿が現れた。

「やった、ヤツタぞ！ 口裂け女を倒したぞ！」

アキラの歓喜の叫びがお化け公園に響き渡った。

その姿に、公園の出入り口でアキラを見守っていた三人が喜びの声を挙げながら走ってきた。

「アキラ、マジすげーよ！」

と目を輝かせる優也。

「でも、今の光の柱をどうやって出したんだ？」
と将太が聞いた。

「分からない。気が付いたら出してたんだ」

島崎は、倒れている口裂け女の下へ恐る恐る近づいた。

大きな穴が開いた頭から、口の中が見える。

かなりグロテスクな状況だが、島崎はカメラの電源を入れた。

カメラのモニターを見ながら、ベストショットなアングルを模索してゆく。

島崎は、何気に違和感に気付いた。

目がこつちを向いてる……

「ぎゃああつ！」

島崎の悲鳴が聞こえた。

アキラ達が振り返ると、死んだはずの口裂け女が島崎の首を片手で握り締め、持ち上げていた。

そして、四人の目の前で穴の開いている頭が閉じてゆき、傷ひとつ無くなった。

「やめろ！ 狙いは俺だろ！ 島崎を放せ！」

「お前の持つている水晶玉と交換だ」

「くそっ」

齒を食いしばるアキラ。

どうする……？ 渡す……か。

でも、水晶玉を渡せば、もう口裂け女には太刀打ちできなくなる！
でも見殺しなんて出来ない……

アキラの額から、大粒の汗が流れた。

口裂け女はニヤリと不気味な笑みを浮かべている。

その時、金属音が公園内に響いた。

顔を歪める口裂け女。

なんと、後ろに回りこんだ優也の鉄バットが口裂け女の顔面を捉えたのだ。

衝撃で手の力が緩み、島崎が地面に倒れる。

すかさず将太が島崎を引っ張り出した。

「やれーっ、あきらあー！」

将太が叫ぶ。

「言われなくても。コツは解った、もう一発やってやる」

パンチを溜めるアキラの拳から強烈な閃光が発せられ、瞬時にその光は拳の中に消えた。

「くらえええっ！」

アキラが突き出した拳から放出された光の柱が口裂け女の腹を貫

いた。

そのまま、光の柱は公園の四隅に設置されている灯籠とうろうの一つを木
っ端微塵に吹き飛ばした。

石や砂が飛び散り、灯籠の面影も無くなってしまった。

「やっべえ」

その光景を目にした口裂け女が高らかに笑い声を上げた。不気味
な女の声だ。

「これで私は自由……やっとこの牢屋から出れる」

「何だって!？」

アキラの声に耳を傾ける事なく、口裂け女は一目散に公園から抜
け出し夜の町に消えた。

「どうすんだよ……あきら」

力無く崩れ落ちる僕の耳には、誰の声も聞こえて来なかった。

退治どころか、封印を解いてしまった。しかも不死身だ……

どうすれば良いんだ。

つつく

（結）（前書き）

初めて、一つの作品を完成させました。

4部と限定しているので、まとめる作業が凄く大変なんだと痛感しました。

文字数との戦いでしたね（笑）

文章力があればもっと上手く纏めれたはずなのが残念です。

結構、無理に押し込んだ感があるのは否めませんが、良かったら見てやってください

（結）

人気のないトンネルを一台のバイクが猛スピードで入って来た。バイクに跨っている二人の少年は高校生くらいだろうか、どちらも恐怖に駆られた表情をしている。

「あいつだ。なんで前にいるんだよ」

後部座席にいた高校生は言った。

彼らの目の前には、赤いワンピースを着た女が耳元まで裂けた口を露わにし、二人をじっと見つめている。

「クソっ！」

バイクを旋回させ一気にハンドルを捻^{ひね}り込んだ。

トンネル内にフル稼働するエンジンの音が鳴り響く。

「マジかよ！」

なんと、バックミラーに写る口裂け女が走りながら近づいてくる。スピードメーターの針が六十キロを示した時には、バイクと平行に走っていた。

次の瞬間、トンネルから猛スピードで飛び出したバイクは、走行中の三トントラックと衝突し、凄まじい破壊音と共に乗っていた二人は弾き飛ばされた。

ピクリとも動かない運転をしていた高校生を見ながら、後部座席にいた高校生は、骨が折れた体を動かさずにいた。

乗っていたバイクは、原形が解らないくらい形が変わり、曲がったタイヤが情けなく回転していた。

トラックの運転手もフロントガラスに頭をぶつけたのか俯いたまま動かない。

すると、口裂け女は運転していた高校生の前に立つと、急にしゃがみ込んだ。

そして、耳元まで大きく開いた口が、運転していた高校生の頭を

丸ごと口に入れると、一気に体から引きちぎった。

まるで、固いせんべえを噛んでいるかの様な音が、口裂け女が咀嚼^{そし}している口から発せられる。だがその顔は、甘いスイーツを食べる女の子の顔と似ていた。

口裂け女は、口に入っていたモノを飲み込み、しばらく余韻に浸ると、次は後部座席に乗っていた高校生に狙いを付け歩み寄ってきた。

「やめろ……やめてくれ……た、助けてっ」

「うるさい餌^{エサ}は嫌いだね……」

そう言つと、口裂け女の手の中に、死に神が持っている様な鎌^{かま}が現れた。

「ひっ、ひっ……」

高校生の顔からは、今にも絶叫しそうなくらいの恐怖と絶望が垣間見える。

だが次の瞬間！

鎌が餌の首を、容赦なく切り落とす綺麗な音が鳴った。

僕達は島崎と別れると、一旦、将太の家に行き、何か他に退治方法が無いかを調べていた。

小学五年生のわりには、シックかつモダンなインテリアでコーディネートされている部屋が大人っぽくて少し羨ましい。

「将太あ、ココに二泊くらい泊めてくれよお」

優也は、ふかふかのフランスベッドで大の字になりながら言った。「あんまし周りのモノに触らないでくれ、気が散って集中できない」そう言っている将太は、デスクに向かい、ノート型パソコンのキーボードを忙しく叩いている。

そして、将太はパソコンの画面に向きながら僕に話しかけてきた。

「なあ、アキラ。アイツの言っていた事……気にしちゃダメだぞ」
「ああ」

僕は、平静を装いながら答えたが、正直、少しだけ島崎の言葉で落ち込んでいた……

それは、お化け公園で口裂け女が逃げてしまった少し後の事だ。
「アキラ君の強さの秘密ってその水晶玉だったの？」

「ああ、まあね」

そう言った瞬間、島崎の口から大きな溜め息が吐かれた。

「なんかガツカリ。それって、アキラ君が凄いんじゃない、その水晶玉が凄いって事じゃない」

「えっ……？」

「そんなんじゃない、ヒーローって言わないよ。ただその不思議な力に酔いしれてるだけだよ」

その時、優也が怒りながら島崎に言った。

「お前、そんな言い方ないだろ！ 現にみんなを助けてるし、今だってお前も助けて貰ったじゃないか」

「そうね。でも、水晶玉を持っていないアキラ君……一週間前の虐められっ子のアキラ君だったら助けてくれたかしら？」

そう言い残すと、島崎は何故か悲しそうに帰っていった……

正直驚いた……こんな事言われたの初めてだったから。

確かに僕は、水晶玉の力に酔いしれていたのかもしれない。本当のヒーローって何なのだろう……

島崎が言っている事が正しいと思っただけに、返す言葉が無かった。

「ダメだ！ 何にもみつからねえ」

雲を掴むようなモノを探している内にストレスがピークに達した

将太は、両手で頭を掻きむしった。

「なあ、アキラ。その水晶玉ってどこで手に入れたんだ？」

優也は僕の方に首を傾けながら聞いてきた。

「どこでって言うか、塾へ行く途中に空から落ちてきたんだ」

「へえ、そんな事ってあるんだな。神様からのプレゼントみたいだな」

優也はニコツと笑った。

確かに、この水晶玉は何処から来たのだろうか……？

本当に神様から与えられた力なんだろうか……？

部屋に忙しくキーボードをタイピングする音が響く。

「やつぱし、俺達じゃダメなのかなあ。明日が過ぎれば三年間は現れないんだし、その間に退治法を見つけて次に現れた時に倒せば良いんじゃないかあ？」

優也は、ベッドで横になり、肩肘を付きながら言った。

「いや、三年なんて待ってられない」

僕は言った。

なんとしても退治したい、三年も待つなんてそれこそストレスが溜まる。それにももちろんこれ以上被害者を増やすわけにはいかない。「じゃあ、とりあえず今日は遅いし、俺ん家^ちに泊まっていけよ。明日があるんだ、必ず退治しようぜ」

そう言いながら将太は、椅子を回転させた。

「よっしゃー！」

優也が喜んだのは言うまでもない。

その時、僕の携帯電話が鳴った。

こんな時間に一体誰なんだ？　と思ひながら液晶ディスプレイに表示された名前を確認した。

しかし、見覚えの無い番号が表示されているだけだった。

僕は、不信に思いながらも受話ボタンを押し、スピーカーを耳に押し当てた。

「もしもし、アキラ君？ 島崎よ」

こんな時間に一体何の様なんだろ？ またさっきの話を続きをするの？

「ああ、そうだけど何？」

僕はあえて、冷たく返した。

「やっぱり怒ってる？」

「いや、別に」

「実は……謝ろうと思って……さっきは助けて貰ったのに酷い事言っ
てゴメンなさい」

予想外だった。島崎が謝罪するなんて、あの気高い島崎が。

「別に良いよ、そんなに気にしてなかったし」

実は、気にしてたけど……そんな事を女に言うなんてカッコ悪い
し……

「そっか、良かった」

スピーカーから島崎のホツとした溜息が聞こえた。

「話はそれだけか？」

「あつ、実はもう一つ言いたい事があるんだけど……」

そう島崎が話した時、スピーカー越しにもう一つの声が聞こえた。

「私……キレイ……？」

次の瞬間、島崎の悲鳴が聞こえた。

最悪の想定が頭を過ぎる間もなく、ノイズ混じりに口裂け女の声が聞こえてきた。

「コノ……女ヲ……返シテホシケレ……バ……水晶玉ヲ……ワタセ」
そう言い残し、電話はプツリと切れた。

僕は放心状態で携帯電話を折りたたみながら口を開いた。

「島崎が……口裂け女に捕まった」

「マジかよ!!」

優也がベットから跳び起きた。

「どうすんだよ、アキラ!？」

将太も驚いた表情で言った。

「助けるしかないだろ」

「どこに居るか言ってたか？」

将太が聞いてきた。

「いや、言わなかった」

「じゃあどうやって捜すんだ？ 公園に居ないとなると、街中を捜すのは大変だぜ」

優也が言った。

緊迫した空気が、僕達を包み込んでゆく。

「クソっ！」

僕は、行き場の無い憤りを拳に込め、床にぶつけた。

その時、僕の意志とは関係なく、ポケットの中の水晶玉が強烈な閃光を放った。

光が序々に収まり、ゆつくりと目蓋まぶたを開くと、ソコは僕達の通っている学校の廊下だった。

「俺達の学校じゃないか……」

辺りに視線を巡らしながら優也が言った。

どうやら、優也と将太にも同じモノが見えているみたいだ。すると、僕達が歩かずとも周りの光景が進んでいく。

まるで水平のエスカレータに乗っている様だ。

闇夜の中、蛍光灯がチラチラと点滅した不気味な廊下を、僕達はただ運ばれていく。

階段を下り細い廊下を真っ直ぐ進む、突き当たりの角を曲がりトイレの前を通り過ぎ、保健室の扉をすり抜けた。

すると薄暗い保健室の中、部屋の隅にある丸い柱に、島崎が黒いロープの様なモノで縛られ気を失っている姿が目に入った。

「島崎っ！」

僕は、島崎に聞こえる様に叫んだが、全く気が付かない。と言うよりも聞こえていないようだ。

「とにかくロープを引きちぎろう」

将太がそう言い、一歩踏み込んだ瞬間、再び強烈な光が僕達を包み込んだ。

光が収まり目を開けると、さっきまで居た将太の部屋で、さっきまでと同じ姿勢で立っていた。

ただ、部屋の中心で水晶玉が中に浮き、ゆっくりと地面に降りた。

初めての体験で僕達は驚き、何が起こったのか理解が出来なかった、だけど……解った事が一つだけある。

僕達は、お互いの目を見ながら同じ事を考えていると感じ取り、急いで部屋を出た。

ゆっくりと島崎の目が開いた。

何が起こったのか解らないと言った感じで、忙しく辺りを見回し、状況を把握しようとしている。

チラチラと蛍光灯が点滅し、薄暗い部屋、体重計に身長測定器、救護用具が所狭しと並んでいる棚……それらを目にし、島崎は今、学校の保健室にいるんだと解った。

「保健室……」

そう言って動こうとした時、島崎は体が何かに締め付けられ柱に固定されて、動きを封じられている事に気付いた。

「何これっ!？」

首や、胸、腹……足にまで絡みつく黒いロープの様な物。
薄明かりの中、身動きが取れない状況だが無理に首を動かし、胸に巻きついていてるロープに目をやった。

黒い一本一本の系の様な物……その時、島崎はソレが何なのかが解った。

髪の毛!!

しかも力ナリ長い。

「ヨウヤク気付イタネ」

低く陰気でおぞましい声が、島崎の頭上から聞こえた。

凍りつく島崎がゆつくりと顔を上に向けると、アノ女……いや、妖怪の不気味極まりない顔が目と鼻の先に見えた。

なんと口裂け女は、丸い柱に逆さのまましがみ付き、長く伸ばした髪の毛で島崎の体を柱に括り付けていたのだ。

恐怖の余り声が出ない島崎。

「まあ、そんなに怖がらなくても今は殺しはしない……あのガキ共が持っている水晶玉を手に入れるまでは」

耳元まで裂けた大きな口が巨大な三日月型の様に見える。

「アンタみたいな妖怪、アキラ君が必ず退治するんだから」

島崎に残された最後の抵抗だった。

すると、口裂け女の表情が険しくなり、懷から取り出した出刃包丁を島崎の唇に引っ掛けた。

「お喋りはその辺にしておかないと、お前の口も私と同じようにしてやろうか？」

序々に島崎の口角が押し上げられていく。

できる限り顔を背け、目を瞑る島崎。

その時、目の前の保健室の入り口にある、扉のガラスが金色の輝

きを放った。

途端に、光の放射線がガラスを突き破り、口裂け女の顔面に直撃した。

ガラスが粉碎する音と、口裂け女の悲鳴が同時に聞こえ、口裂け女は保健室の壁に激突した。

その衝撃で、柱に巻きつけていた口裂け女の髪の毛が引きちぎれた。だが、不思議な力で未だに島崎を柱に締め付けたままだ。

「島崎っ！」

木っ端微塵に吹き飛んだ扉の前に現れたのは、言うまでも無くアキラ達だった。

「アキラくんっ！」

「今助けてやるからな」

そう言って、アキラが保健室に足を踏み入れたと同時に、不気味に輝く出刃包丁がアキラの頬を掠めた。

驚くアキラの頬に一筋の赤いラインが出来た。

「助ける？……助けるだとお？ 私との約束はどうした？」

「知らねえなあ」

アキラは鼻で笑いながら言った。

その隙に、優也と将太は、島崎の元へと向かった。

「いくらやっても私を倒す事ができないのがまだ解らないのか」

「お生憎様、俺バカだから……力が続く限り闘ってやるさ！」

拳を握り締め、腰を低くしたアキラ。

口裂け女の手握られている出刃包丁が、みるみる姿形を変形させ再び巨大なハサミへと変わった。

まず仕掛けたのは口裂け女だ。

アキラに突進しながらハサミを開閉させずに突き刺そうとして来たのだ。

その時、アキラは大声で叫んだ。

「ポマードっ」

途端に口裂け女の動きが止まり頭を抱えながら苦しみ出した。

続けて、アキラの容赦のないタブーアタック（禁句単語の攻撃）が始まった。

「ポマード ポマード ポマードっ」

「やめろ……うるさいっ」

耳を塞ぐ口裂け女。

「よし、効いてるぞ」

将太がガッツポーズをとった。

「ポマード！」

と言う言葉と同時にアキラの突き蹴りの猛連打が、口裂け女の全身を打ちのめす。

アキラの攻撃が終わったときには、口裂け女の体はボコボコに凹み、体の形が変わっていた。

「どうだ、少しは効いたか？」

アキラは構えながら言った。

すると、みるみる内に口裂け女のダメージが回復してゆく。

「いや……もう戻った。それに、もう慣れたよ」

「慣れた？」

アキラが聞き返す。

試しに、アキラはもう一度叫んだ。

「ポマードっ」……

だが、口裂け女は一向に怯む様子がない。

次の瞬間、ハサミから更に変身したハンマーがアキラの腹部を直撃した。

予想外のダメージに、一瞬何が起こったか解らなかったアキラは、廊下の壁を突き破り校庭へと吹っ飛ばされた。

「今のは効いたぜ……」

まるで、腹の急所を思いつき殴られたような感覚だ……って、それで済んだからマシか。

僕は、目の前のグラウンドの土を握り締めた。

負けてたまるか。

アキラが、気合を取り戻し顔を上げたと同時に、目の前に鉄の塊が見えた。

再び容赦の無い振りかぶった鉄のハンマーがアキラの顔面を捉える。

鈍い音が響き渡った。

流石に意識が飛びそうになった。

地面を転がり、何とか立ち上がったが、目の前がクラクラして立っているのがやっとだ。

「もう終わりか？」

口裂け女は不適な笑みを見せた。

その時、アキラは一気に突き出した拳から光の柱を放った。

だが、口裂け女はハンマーを鏡の様な物へと変化させると、飛んでくる光の柱に向かわせた。

すると、光の柱は鏡に反射し、アキラの元へと返っていった。

アキラの断末魔が鳴り響いた。

それに気付いた優也は、廊下の壁に開いた穴から校庭を覗き込む

と、アキラが倒れているのを発見した。

その先にはアノ妖怪。

「将太！ アキラがヤバイっ」

「何だって！？ こっちも全然取れやしない！」

額に汗を滲ませながら将太が言った。

「俺たちも一緒に闘おう」

優也が真剣な表情で言った。

「行つて。私は良いから」

島崎は、それが最善の策だと思ったのだろう。

「駄目だ……あのアキラでも倒せないのに俺たちが行ったら……それよりも島崎を助け出す」

将太は再び島崎を縛っているロープを掴んだ。

朦朧とする意識の中、アキラはポケットから転げ落ちた水晶玉を眺めていた。

「初めから素直に渡していれば」

そう言いながら口裂け女は手にした鎌でアキラの首を切り落とそうと、大きく掲げた。

ここまでか……

鎌を振りかぶると同時に、口裂け女の額に矢が刺さった。

間一髪、斬首を免れたアキラは地面にへばり付きながら矢が放たれた方を振り返った。

「銀の矢でも効果なしか……」

そう言い現れたのは、モクドネルデで話しかけてきた特殊捜査官

「寺村 蓮」だ。

「何者だ、貴様は？」

口裂け女は、額から矢を抜き取り両手で折り曲げて割った。

「一々名乗るか、この阿婆あはす擦れ女が」

寺村は、アキラの元まで近づくと地面に転がっていた水晶玉を拾い上げた。

次の瞬間、アキラの目の前で水晶玉が寺村の体に溶け込んでいった途端、体から光と暴風が発せられ砂埃すなほこりが渦を巻いた。

「戻ったぜえ、俺の力が！」

勇ましい笑顔を見せた寺村は、口裂け女の腹部に強烈な蹴りを放った。

数十メートル吹っ飛び、植物園へと姿を消した口裂け女。

「アキラ、この袋の中にある物を図の通りに並べて、紙に書いてある呪文を唱えろ」

そう言いながら、大きな布袋を渡されたアキラ。

その時、植物園の方から光る無数の何かが、アキラ達に向かって飛んでくる。

月の光に照らされ、姿を現したのはナイフだ。

『無駄な弾も数打ちや当たる』と言う言葉があるが、そのほとんどが『無駄』に見えない。

「うわっ！」

アキラは、怖じ気づき両腕で顔を隠した。

だが、寺村は微動だにせず両手を前に突きだし気合いを入れた。

「はあああつ！」

一瞬、地面が揺れた様な気がした。

すると、僕の目の前……いや、寺村さんの目の前で無数のナイフが勢いを失い、逆に植物園のほうへ返っていった。

こんな技は初めて見た。

この人は、明らかに水晶玉の力の使い方を知っている、と言うか

知り尽くしている様だ……

本当の持ち主！？

「アキラっ、ココは危険だ。出来るだけ離れてから呪文を唱えろ」

「わ、わかりました」

そう言って、僕は立とうとしたが足が動かない……震えている。

その時、僕の心の中にあつた小さな恐怖が大きく膨れ上がり、僕自身を支配している事に気付いた。

下手に動けば巻き添えを喰らってしまうかも知れない。

後ろの校舎を振り向いた。

島崎が未だに柱に括り付けられ、僕を見つめていた。

「なんかガツカリ。それって、アキラ君が凄いいんじゃない、
その水晶玉が凄いつて事じゃない」

島崎の言葉が僕の脳裏に蘇ってくる。

今になって、やっと気付いた……水晶玉の力がなければ僕はタダ
の……

その時、アキラの目の前で、島崎を縛っていた口裂け女の髪の毛
が生き物の様に動き出し、島崎を助けようとしていた優也と将太ま
でもを縛り上げた。

「ぐわあっ、助けてっ」

優也が叫ぶ。

島崎の首に巻き付いていた髪の毛も、序々にプレッシャーを高め
てゆく。

髪の毛に縛り上げられ宙を浮く優也と将太。藻掻もがけば藻掻くほど、

三人の体に容赦なく髪の毛が食い込んでいく。

「アキラ君、助けてえっ！」

島崎の悲鳴にも似た言葉を聞いた瞬間、僕は無我夢中で島崎達の元へと走っていた。

僕しか居ない、僕がやらなきゃ、僕がみんなを助けるんだ！
ただその思いだけで僕は走った。

植物園から現れた口裂け女の体には無数のナイフが刺さっていたが、寺村の前で傷が塞がっていき、無駄だと言わんばかりに地面に落ちていった。

「刃物を大量に所持しているんじゃない、自由自在に刃物を練金できるとは恐れいったよ」

そう言つと寺村は、胸の前で両手を向かわせ集中し始めた。

「いくらやつても無駄だ」

「解つてる……だからお前の体を粉々にしてやるよ」

寺村の手の中に光の塊が閃光を発しながら現れた。

「くらえっ！」

野球の球を投げるかの様に振りかぶった寺村の手から、バスケットボールほどの大きさの光の弾が口裂け女目掛け突進した。

口裂け女は、ニヤリと不気味な笑顔を見せながら手の中に再び鏡の様なモノを出現させた。

光の弾は、鏡に当たるや砕け散りグラウンドに雨の様に降り注いだ。

「チッ」

寺村は眉間にシワを寄せながら舌打ちをした。

走る僕の目の前に光りの粒が落下してきた。

ふと上を見上げると、今、落下してきたモノが大量に降り注いで来ている。

「マジかよ！」

一見、流星群の様に美しい気がするが、さっき堕ちた地面をみれば解る。

死ぬ

降り注ぐ光の雨を僕は必死に避けながら島崎達の元へと走った。踏み込む足のすぐ側に穴が開き、僕の耳を光りが掠^{かす}れ、脇の間を通ってゆく。

一発でも当たれば一溜まりもない。

何とか僕は保健室の中に到着し、苦しんでいる三人の前で急いで寺村から渡された布袋を開いた。

中には、呪文が片仮名で書かれた紙と、マッチ、地面に絵を描く為のチョーク、蠟燭^{ろうそく}と何故か眼鏡、あとそれら図面が入っていた。急いで僕はそれらを取り出し、図に描かれている通りに並べていく。

一メートル程の円の四隅に蠟燭を立て、袋に入っていたマッチで火を着ける。

これは魔法陣だ。

中心に眼鏡を置き、僕は呪文が描かれた紙を読み始めた。

「ナースグル アパプリカ デイモル、 ベーベル ランティカ ダンザテ」

こんな馬鹿げた事をして一体何が起きるんだ？

だけど僕の後ろで今にも死んでしまいかも知れない三人を前にし

て疑う余地は無い。

「シユテーム オグリスカ ファヌン、アスミタス イヌンスカ
クロアスタ ファルコー！」

これで全部読んだぞ……何が起きるんだ？

すると、空から淡い光の塊がゆつくりと降りてくるのが見えた。
その光は、寺村と口裂け女が闘っているグラウンドに降り立った。
動きが止まる寺村と口裂け女。

光が収まっていくと、中から一人の男が現れた。

医者に見える白衣を来た三十代の男。七三分けが徹底されている
頭髪はカナリの整髪料が使われていそうで、見るからに一昔前の男
だ。

「お前は……馬鹿な！？」

男は、口裂け女を見るなり急に怯えだした。

その姿に、口裂け女の表情が今までに見た事がない程の怒り、憎
しみの相が滲み出ている。

「やっと会えましたね……先生……長い間ずっと待ってました……
よくも私の顔を、こんな醜い姿にっ！」

「すまない、本当に申し訳無かったと思ってる」

「黙れえええっ……！」

口裂け女は叫びながら、巨大なハサミを男の胸に突き刺した、と
同時に強烈な閃光を放ち二人は白い光に包まれ空に昇って行った。

途端に、島崎と優也と将太を縛り上げていた髪の毛が解^{ほど}け、消え
ていった。

咽^むせる三人を見て、アキラは力尽きるかの様に地面に座り込んだ。

日曜の朝もモクドネルデは中々の繁盛ぶりだ。

僕と、優也に将太、それに島崎の四人は、店内の一番奥の席にいた。

昨日の一件の後、寺村さんが協力してくれたお礼がしたいと僕たちを呼び出したんだ。

五本目のフライドポテトに僕が手を付けた時に、寺村さんが入ってきた。

「おつ、みんなもう揃ってるな」

「あれ？ 今日私服なんですね」
と聞いたのは将太だ。

「いやー、実はアレ嘘なんだ」

少し申し訳なさそうに寺村さんは謝罪した。

「だけど、僕たちの「エエエッ!？」て声が店内に響き渡ったのは言うまでもない。」

「君達を信用させるには仕方が無かったんだ。許してくれ」

寺村さんは顔の前で両手を合わせた。

「僕の目の前にワザと水晶玉を落としたのも寺村さんなんですよ？」

「それは違うよ。別件で他の敵と闘ってるときに、爆風に巻き込まれて水晶玉を無くしてしまったんだ。諦めかけてた時に、今回の事件が起きて君達に辿り着いたって訳」

そう言いながら寺村さんは僕のフライドポテトを齧った。

まあ、今日だけは大目に見よう。

「でも、本当にあの口裂け女を退治したなんて、まだ信じられないよ」

優也は頭の後ろで手を組みながら言った。

「俺自身も、成功するとは正直思ってた。悪霊を退治する時に使う手段なんだ。その霊が持つ恨みを解消させてあの世に返すんだ」

「だから、降霊術で口裂け女の手術を失敗した医者の人を呼び出して恨みを晴らさせたって訳なんですね」

将太がメガネのフレームを押し上げた。

「そゆ事お。てか早くカラオケ行くぞ」

「ヨッシャー歌いまくるぞ」

優也が拳を突き上げ喜び、一目散に店を出て行った。

「はしゃぎ過ぎだ」

将太は笑った。

その時、島崎が笑顔で僕に話しかけてきた。

「ねえ、アキラ君。アキラ君が呪文を唱えて私達を助けてくれた時……凄くカッコよかったよ。あれが本当の強さだと思う。やっぱアキラ君は私達のヒーローだよ」

「当ったり前だろ。またいつでも困った事があれば呼んでくれよな」
僕は笑顔で答えた。

数日後……

学校新聞の幻の号外『口裂け女を我等のヒーローが退治』が、僕たちだけに配られた。

おわり

（結）（後書き）

僕の、文章力が低い作品を最後まで見て頂きありがとうございます。
最後のオチ（決着）は如何でしたでしょうか？

一番気になってたりします（笑）

H I K A R I本編の連載も再開しますので良かったら見てやって下さい

ありがとうございました。

次回予告

「ご講評を頂きました」「ヒーローは小学生」の続編の作成を決定しました。

現在、私自身、資格試験の勉強の為、10月まで執筆をお休みしてますんで、それからの作成になります。

ざっとした、あらすじですが、

「口裂け女の事件後、アキラ達は、『幽霊退治部』と言うクラブを作った。

依頼者より持ちかけられた怪現象の裏に潜む悪霊・妖怪の退治を始めようとしていたのである。

そんなある日、アキラ達が住む街の病院で『出産中に母子が立て続けに死亡する』と、テレビのニュースが報じる。

だが、その影に、怪しく渦巻く黒い存在がいる事を疑い始めたアキラ達は、寺村と共に調査を開始するが……」

てな感じの内容を予定してます。

題名は「ヒーローは小学生2〜Defend the life〜」です。

ジャンルは同じく「ホラーバトルファンタジー」です。

テーマは、「命」にしたいと思いますが、まだ、プロットも骨組みまでで、漠然としており、妄想だけが膨らむ一方ですが、最高の形に近づけるようにがんばります。

とにかく文章能力・国語力がまだまだ足りないんで、それだけがネックですが、もっと本を読んで勉強しようと思ってます。

前回より、もうワンランク、文章力が上がるように頑張ろうと思いますので、お待ちしております。ただしたら最高に幸せです。

H I K A R I 本編も、これからどんどんヒートアップして行くので、応援して頂けたら嬉しく思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5029f/>

ヒーローは小学生 ～HIKARI（光） 番外編～

2010年12月13日15時25分発行